S-3-1

本との居場所「読書会」

鈴木遥月（はづき）

わたしは本が大すきなので「読書会」というタイトルが気になり、この本を手に取りました。

この本は、わたしと同じように本が大すきな小学六年生の主人公、稀桜（きお）が図書館や本屋さんがない町で、友だちや家族、大人たちの力をかりながら本との交りゅうをふかめていくお話しになります。

わたしはお母さんたちが仕事でいそがしいので、小さいころからばぁばじぃじに毎週まで、図書館へつれていってもらいます。住んでいる町だけでなく、となり町など全部で五ケ所ほどの図書館へよく行きます。たとえば、お気に入りの小説がある図書館。集中してべん強をしたいときはしずかな図書館。本のイベントを行なっている楽しめる図書館など、その日の気分で図書館をえらんで行きます。

（高学年用）

「ふくろとじ」にする
（　）は一字分として書く。書くことがらが変わるときは、行をあらためて、一字下げる。
話しことばの「……。」も行をかえる。
詩は全行一字さげに書く。
たて書きのときは、漢数字を使う。

そのおかげで新しい本を直せつ手に取り、出会うき会(がい)会がたくさんあると思いました。わたしはこのかんきょうだったからこそ本が大すきになな。たのかもしれません。

本と出会える場が少ない稀桜は、思いっきり本についてしゃべりあう仲間を集めて、推(お)し本をしょうかいし合っ。たり、同じ本をみんなで読んで感想を話したりする読書会を始めます。この読書会の場所(あ)には自分のことをま女というオーナーの愛沙さんがいます。稀桜たちがこまっ。たり、どんな気分の時でも愛沙さんの一言がみんなをえ顔にしてくれます。そんなところがま女のステキなまほうのようでふしぎだと思いました。

愛沙さんにたすけられながら読書会をすすめると、仲間たちのなやみや、せいかくも知れるきっ。かけになります。わたしは、本にたいする考え方が家ていによってそれぞれちがうことに少しおどろきました。わたしの家族は読み聞かせしてくれていたころから本とた

（高学年用）

（20×10）

・。「」（）は一字分として書く。書くことがらが変わるときは、行をあらためて、一字下げる。
話しことばの「……」も行をかえる。
詩は全行一字さげに書く。
たて書きのときは、漢数字を使う。

ふくとし にする

校長印 | 担任印 | 学年 年 組 | 行数

くさんかかわらせてくれているけれど、本が大すきなのに本よりもべん強をしなさいと言われたり、なかなか本を買ってもらえなかったりする家族もいて、もっと自由に本が読めればいいのになと思いました。そんなじょうきょうでも、絲桜たちは新しい本との居場所を自分たちの力で作るために、家族や大人に本への強い気持ちをつたえます。仲間たちときょう力し合い、くふうしてみんなを本の世かいにつれていくところがすごくかっこいいと思いました。

わたしは一年生の時、「図書室に行こう」と友だちをさそってもことわられてしまったり、本がすきな子が少なくてさみしいなと思ったこともあります。だけど、友だちのことを色いろと知っていくと、実は同じ本がすきなことが分かって、本の話を始めるとわくわくドキドキして話しが止まらなくなるほどうれしかったこともあります。同じ本でも文章から想ぞうする絵や広がるイメージもそれぞ

（20×10）

（高学年用）

話しことばの「……。」も行をかえる。
詩は全行一字さげに書く。
たて書きのときは、漢数字を使う。

。、「」（）は一字分として書く。書くことがらが変わるときは、行をあらためて、一字下げる。

校長印		担任印		学年	年 組	行数	

れちがうところがおもしろく感じます。だからこそ、この本を読んでわたしも読書会をやってみたいと思いました。本が苦手な人にも本のよさを知ってもらいたいし、一さつの本で意見を交かんしたり、ステキな本や仲間とめぐり会えたらしあわせだと思います。そのためにも、これからもはば広いしゅるいの本を読んで、もっともっと本が大すきになります。

、。「」（）は一字分として書く。書くことがらが変わるときは、行をあらためて、一字下げる。
話しことばの「……。」も行をかえる。
詩は全行一字さげに書く。
たて書きのときは、漢数字を使う。